

中学生連載企画 私たちのふるさと松山学 No.27

城西中学校

四国第一の俳人栗田樗堂

私たちは城西地域の偉人で江戸時代に活躍した俳人・栗田樗堂について調べました。

四国第一の俳人・栗田樗堂

松山の俳人といえば正岡子規が有名ですが、子規が活躍するよりも100年以上も前の江戸時代の松山で活躍し、子規も四国第一の俳人と称賛している人物が栗田樗堂です。

樗堂は、幼い頃から松尾芭蕉に憧れを抱いており、仕事の傍ら、栗田家の養父

から俳諧を学び始めました。

やがて樗堂は俳人として、伊予の国にとどまらず、全国的に名を知られるようになりました。芭蕉の亡き後、当時の中心的指導者であった加藤晩台の教えを受け、助成金で、樗堂自身が指導する立場となっていました。樗堂のもとには、都から地方から、俳諧の仲間が訪ねて来るようになりました。その中

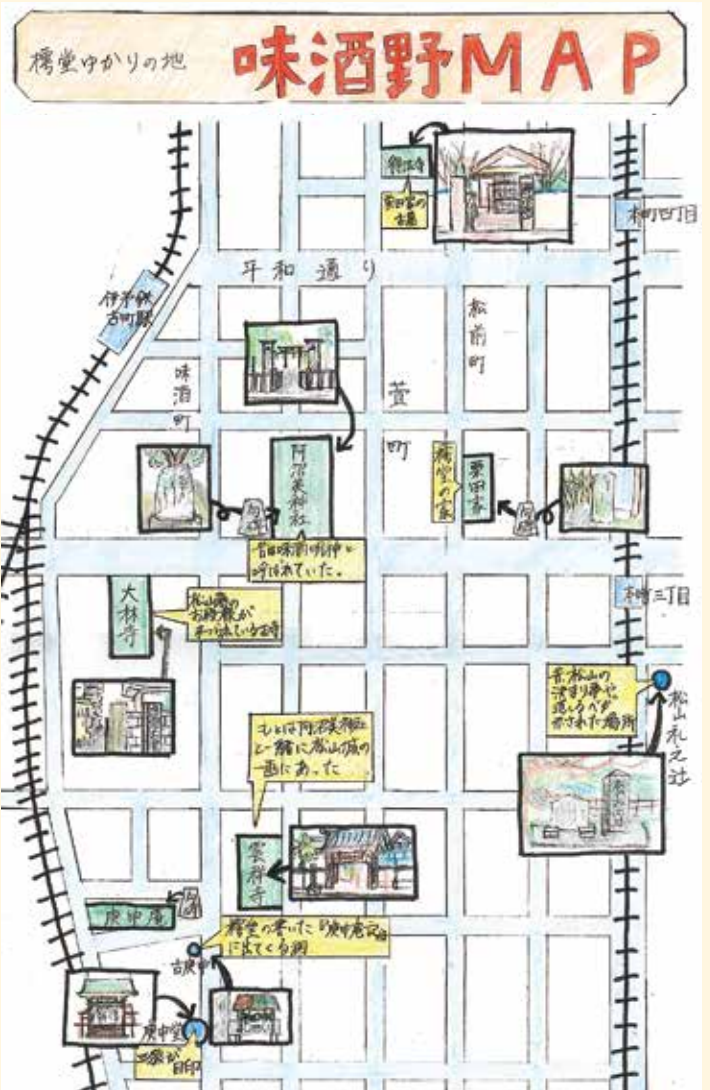
は小林一茶もいました。

「庚申庵」で俳諧に専念

52歳の時、樗堂はついに文人として生きる決意をし、味酒野に、煎茶を味わい、四季の変化を楽しむための質素な庵を建てました。樗堂の

建てた庵は、庚申の年に建てられ、「古庚申」というほころがすく近くにあったことから「庚申庵」と名付けられました。樗堂は、この庚申庵で煩わしい日常から逃れ、俳諧に精進しようと考えました。また、終生の友となった小林一茶との便りのやりとりは、庚申庵でも絶えることなく続き、交流を深めました。

庚申庵を訪問してみよう



栗田樗堂の俳諧人生



七四九年(寛延二年) 松前町の酒造業の家に生まれる。
七六五年(天明二年) 酒造業栗田家の婿養子となる。
この頃より、本格的に俳諧を学ぶ。
七七年(天明八年) 町方大納言役を兼任する暇に、見習とむる。
二年後には、町方大納言役となる。
七八七年(天明七年) 紀伊国(現和歌山県)、大和国(現奈良県)、東(現京都府)などを旅する。この時、京の加藤晩台(江戸中期の俳人)を訪ね、俳諧を学ぶ。
七九一年(寛政三年) 町方大納言役を引退。東に上り俳諧を学ぶ。
七九五年(寛政七年) 小林一茶(俳諧)を訪ねる。樗堂、温かく迎える。
七九六年(寛政八年) 秋に一茶(俳諧)を訪ねてくる。
八〇〇年(寛政十二年) 松山市味酒二丁目に庚申庵を建てる。
八〇二年(享和二年) 町方大納言役を引退。
八〇七年(文化四年) 御手洗島で隠居生活を送る。
八十四年(文化十一年) 六十六才で永眠。

○栗田樗堂について

栗田樗堂(くりた ちよどう)
寛延(かえん)2年~文化(ぶん)11年
(1749年)~(1819年)
松前町の酒造業(りくざい)の婿養子(むこやしご)として生まれました。子供の頃は(こどものころ)「さだむら」と呼ばれていました。
17歳の時に、同じ町内で酒造業を営んでいた松山でも屈指の大店(おおだん)であった栗田家の養子(やしご)となり、7代目を継ぎました。
後継家(ごけいけ)・栗田家(りくだいけ)とともに町方大納言(まちかたのなごん)候(こう)に任じられたおかげにより、(おかげ)で、栗田樗堂(りくだい)は(は)52歳(さい)で町方大納言(まちかたのなごん)になり、54歳(さい)でやめました。約30年間(約30ねん)松山(まつやま)に在(あ)りました。
※町方大納言(まちかたのなごん)の職(しやく)や裁判(さいばん)を行う町奉行(まちぶぎやう)の下で、町方の行政(ちやうせい)を取りしきる責任(せきにん)のこと。寛政(かんせい)12年(1800年)52歳の時、俳諧(はいかい)に専念(せんねん)しようと、「庚申庵(こうしんあん)」を建設(けんせつ)しました。

栗田樗堂の俳句
夏霞(なつがすみ)む日(ひ)や
蟬(せみ)の聲(こゑ)

「べつたりと夏霞(なつがすみ)む日(ひ)や
蟬(せみ)の聲(こゑ)」

「べつたり」の發音(はつてい)が、無風(むふう)が舞(ま)う舞(ま)うの町(まち)を彷彿(ふふ)とさせる。さらに(さら)に(に)蟬(せみ)の(の)大(おほ)鳴(な)りが(が)響(こ)え(え)られ(ら)れ(れ)ない(ない)熱(あつ)氣(き)を(を)伝(つた)へ(へ)て(て)いる。視覚(しきやく)と聴覚(ちやうかく)の相(あ)乗(のり)効果(こうか)がある。

○栗田樗堂の俳句

「はつざくら はなのよのなか
よかりけり」
「一日(いちにち)も 捨(す)てる日(ひ)はなし
梅(うめ)の花(はな)」
「そろそろと 若葉(わかば)になりし
老木(らうぼく)かな」

「さむしろに
みな親(おや)よ子(こ)よ
背(せ)戸(と)涼(すず)」

「さむしろ」の発音(はつてい)が、無風(むふう)が舞(ま)う舞(ま)うの町(まち)を彷彿(ふふ)とさせる。さらに(さら)に(に)蟬(せみ)の(の)大(おほ)鳴(な)りが(が)響(こ)え(え)られ(ら)れ(れ)ない(ない)熱(あつ)氣(き)を(を)伝(つた)へ(へ)て(て)いる。視覚(しきやく)と聴覚(ちやうかく)の相(あ)乗(のり)効果(こうか)がある。

樗堂の俳諧への思いは多くの人に受け継がれ、みんなが俳句に親しむまち、松山へとつながっていきます。また、庚申庵は樗堂が生きた頃の姿に復元され、当時の様子や樗堂の思いをしのぶことができます。庵の縁側に座って庭を眺めていると、樗堂の時代を感じられるかもしれません。

庚申庵の庭は自然に囲まれていて、和室からは美しい池や四季折々の花を見ることができます。和室の造りは簡素です。これは、建物が朽ち、土に戻っていくことを前提に造られており、人生がはかないこと、人間もいづれこの世から去ることにつながっています。また床の間のない部屋や、腰かがめて入る煎茶のための茶室には、樗堂の「身分に関係なく俳諧や煎茶を楽しんでほしい」という思いが表れています。

夢中になれるものを大切に

栗田樗堂は、権力や名誉などにとらわれず、俳諧に人生をささげた人で、樗堂が詠んだ句には温厚なものが多く、人柄が表れています。私たちは、今回樗堂について学んでいくうちに、人に対する思いやりの気持ちの大切さやみんな平等であるということあらためて考えることができました。樗堂の俳諧に対する熱意のように、私たちが夢中になれるものを大切にしていきたいと思いました。



(後列左から) 森松 優さん(3年)、西山 愛梨さん(3年)、岡本 隆之介さん(3年)、(前列左から) 永木 音葉さん(3年)、正岡 優奈さん(2年)、武智 友香さん(3年)

松山の先人や文化に関する心に響くエピソードをまとめた教材集です。一話が10〜14ページ程度で、気軽に松山ゆかりの先人の足跡や文化に親しむことができます。市立図書館で見ることが出来ます。



先人と文化の読み物教材
「語り継ぎたい
ふるさと松山 百話
I・II・III・IV」
第Ⅲ巻に栗田樗堂を収録